

図書部研究報告

『所蔵史料目録データベース』の構築と 公開について—現状と課題—⁽¹⁾

内 村 奈 緒 美

1. はじめに

東京大学史料編纂所では、日本史史料の研究・編纂の支援を目的として、1984年以来、東京大学史料編纂所歴史情報処理システム“SHIPS”(Shiryō Hensan-jo Historical Information Processing System)という総称のもとに、教官が様々なデータベース〈表1〉を構築し、学術情報センターの“NACSIS-IR”を通じて公開してきた⁽²⁾。

〈表1〉SHIPS データベースの内訳

データベース名	データベースの概要
古文書目録	史料編纂所所蔵影写本に収められた古文書目録
大日本史料索引	『大日本史料』の索引
大日本史料書名索引	『大日本史料』の引用書名の索引
中世記録人名索引	中世の記録史料の人名索引
維新史料綱要	『維新史料綱要』網文検索
編年史料網文	『大日本史料』網文索引、維新と同システム
古記録フルテキスト	『大日本古記録』の全文検索
古文書フルテキスト	古文書のフルテキスト
編年カード	『大日本史料』編纂のためのカードシステム
(島津)史料目録	本所所蔵島津家文書の目録

横山伊徳「史料編纂所歴史情報処理システムについて」より

一方、図書室においても、従来、史料の受入・整理を円滑に行うために、業務用データベースを種々作成し、データを蓄積してきた。

1997年2月、コンピュータの新システム導入（以下「リプレイス」）が実施されるのに際し、これまで図書室で作成してきたデータベースを統合し、『所蔵史料目録データベース』を新たに構築する機会を得た。

本稿では、スタッフの一人としてこのデータベースの構築・公開作業に携わってきた筆者が、現状と、反省を含めて課題を示したいと思う。

2. 史料編纂所歴史情報処理システム (SHIPS for Internet) 上での『所蔵史料目録データベース (ver. 1)』の公開

2.1. それまでの経緯

“SHIPS”のメインフレーム (ACOS) に『マイクロ管理データベース』(教官が採訪し、撮影したマイクロフィルムのデータベース)を作成し、1985年より所内教官向けに公開していた。

その他の史料については、入力データを一般に公開することは特に想定せず、各担当者が、史料形態別に『桐』(管理工学研究所製アプリケーション)で業務用ファイルを作成していた。結果的に、担当者のみが電子化されたデータを管理・検索できる状態が続いていた。ただし、そのうち写真帳の入力データをもとに、『東京大学史料編纂所写真帳目録』を出版した(1996~7年)。

一般に公開されていた所蔵史料の検索手段は目録カード(閲覧室備付け)と冊子体目録(『東京大学史料編纂所図書目録 和漢書写本編』『東京大学史料編纂所写真帳目録』等)のみであった。

2.2. リプレイスに伴う、史料編纂所歴史情報処理システム (SHIPS for Internet) の公開計画

リプレイスにより、ネットワーク環境の整備、導入パーソナルコンピュータ(PC)の高性能化を行い、“SHIPS”をインターネット(World Wide Web [以下「WWW」]を利用)上で公開することが計画されていた⁽³⁾。

同時に“SHIPS”に含まれる『マイクロ管理データベース』の移行をどうするかという問題が生まれた。担当者を中心に図書職員とリプレイス担当教官とで検討した結果、この機会に、マイクロフィルムだけでなく、すべての史料を対象とした所蔵史料の目録データベースを構築してはどうかということになった。

具体的には、『マイクロ管理データベース』と、業務用データベースのすべてのデータを統合し、一つのデータベースを構築し、広く公開するということである。

内容がどうなるか予測が立たず、不安ではあったが、所蔵史料の目録をインターネット上で公開するということは、筆者はもとより図書職員が抱いていた希望であった。実現する機会に恵まれたことは、幸運であったと思う。

2.3. 『所蔵史料目録データベース (ver. 1)』の新規構築⁽⁴⁾

構築にあたって、最初に行った作業は、『マイクロ管理データベース』を含め種々あった業務用のデータベースのフォーマット(階層・項目等)を統一することであった。階層構造・項目内容は、既存の各データベースを集約させるものとした。入力作業をなるべく簡易にするため、類似項目はまとめ、項目数を少なくするようにつとめた。

併せて、入力が煩雑であったメインフレームでの入力を廃止させてもらうことにした。そこで、PC上でデータをCSV形式のテキストファイルに変換出力(コンバート)し、それを公開用データベースへ移行するシステムをとることとなった。データ入力に際しては既存アプリケーション(“MS-Access”あるいは『桐』)を利用した。

リプレイスによりネットワークが整備され、PCサーバ(NEC製Express Windows NT 3.51を使用)上のファイルを共有できるようになったため、大きなメリットが生まれた。データベースファイルは従来通り各担当者が作成するが、PCサーバ上に保管することにより、図書職員間で閲

覧・検索等を自由に行うことが可能となったのである。

一方、記述に関して、漢字の扱いをどうするかの問題があった。所蔵史料目録の役割として、まず、所在の有無がわかる検索ができればよいと考え、新規入力の際は、新漢字に統一することを申し合わせた。また、コード（EUC コード、漢字コードは第1水準・第2水準の範囲内）にない漢字は、記号（=）で表し、できれば、ヨミガナを補記することにした。ただし、既存のデータは、そのまま（統一がとれておらず、混在）となっている。新漢字への統一や、その際、旧漢字での表記を注記に記述し検索できるようにする、半角と全角文字の使い分け方の統一等の作業は、今後の課題となった。

2.4. インターネット（WWW）を介しての公開

“SHIPS”全体に“Future/Happiness Light for Internet”（株式会社平和情報センター製作、以下「F/H」）が採用された⁽⁵⁾。

これで、利用者がいつでも・どこからでもアクセスできる目録検索サービスを行えることとなった。併せて、一部の史料を対象に画像や解題とのリンクが実現されることになった⁽⁶⁾。

2.3.で述べたように、『所蔵史料目録データベース（ver. 1）』のデータをF/Hに格納するには、CSV形式で出力されたテキストファイルを一括登録する必要がある。登録作業には複雑な工程が含まれる（4.1.で後述する）ため、システム開発業者が担当することとなった。

他方、データの中には、公開にあたらぬものも存在する。業務用のみ使う項目や原蔵者の意向等により公開できない史料等のデータである。これらは、F/Hのシステムで識別してもらえることとなった（非公開レコードには特別な区分コードを付与した）。これで、公開にあたらぬデータも、データベース内に混在させておくことが可能となった。

データ更新に際し、担当者が行う実務は、作成されたデータベースファイルのすべてを、そのままのフォーマットでCSV形式のテキストファイルで出力することだけでよいことになった。

2.5. 検索方法と画面構成

公開にあたり、『所蔵史料目録データベース（ver. 1）』の検索方法と画面構成を次のようにすることとした。

○検索方法

- ・すべての項目（業務用を除く）をキーワード検索できるようにする。
- ・史料形態別に区分し、検索対象を史料形態で選択できるようにする。
- ・簡易検索と詳細検索画面を作成する。（キーワード検索と項目別検索が可能となる。）
- ・検索方式は、完全一致、前方一致、範囲一致ができる。
- ・複合検索（AND/OR/NOT）が可能である。
- ・検索履歴で、検索式を組み合わせ検索することが可能である。

○画面構成

- ・検索結果のリスト表示→詳細表示に推移する。
- ・史料形態別に検索結果の詳細表示形式を変える。

史料区分別に詳細表示を次の四種類設定する。

- ①原本・古写本類、特殊蒐書、写本
 - ②謄写本、影写本、模写
 - ③写真帳など
 - ④写真、フィルム、マイクロフィルムなど
- ・複数の冊次を持つものは、二階層（リンク）で表示させる。
 - ・内容細目を複数持つものは、内容細目を同時に複数表示させる。

2. 6. 『所蔵史料目録データベース (ver. 1)』構築時の課題

この時点での課題には、次のようなものがあった。

項目や階層構造について、既存の業務用のデータベースを中心に考えたため、標準的というよりは、ローカルなものになってしまった。また、リプレイス期日までに日程の余裕がなく、細部にわたって十分に検討することが出来なかった。項目・階層構造とも、再検討の必要性を感じた。

対象とする史料の形態・内容がさまざまである（図書〔刊行された本〕以外のすべての史料が対象）⁽⁷⁾ため、それに合わせて表示形式の種類が多くなってしまい、システム開発業者に負担をかけてしまったと思う。この件についても、もう少し工夫できるのではないかと考えられた。

フォーマットが統一されたとはいえ、データのファイルは史料形態別に複数存在していたので、すべてのファイルをCSV形式で出力するのは、手間のかかる作業となった。そして、更新作業をシステム開発業者に依頼するため、データ更新を頻繁には行えず、半年に1回程度となっていた。更新頻度を高めたいということも、要望としてあがった。

全般にわたって、リプレイス担当教官、科学研究担当教官、計算機システム運用担当教官、システム開発業者、担当図書職員との話し合いを重ね、コラボレーション的に作業を進めていくことができたことは、とても有意義であったと思う。いろいろな視点から、また、各々の知識・技術を生かしながら、構築していくことができたのではないだろうか。この態勢は、現在にも続いている。

とはいえ、筆者は異動してきて間もないこともあり、すべてにわたって知識・経験・勉強不足であった（今でもそうであるが…）ため、個人的には反省点ばかりが思い浮かぶ。

3. 入力管理システム（“Hi-CAT”）の開発

『所蔵史料目録データベース(ver. 1)』を公開して約半年経った頃、幸いなことに、次期リプレイスを考慮に入れた実験の機会が与えられることになった⁽⁸⁾。それは、①既存のPCサーバを活用する、②データベースを管理するシステムを構築し、PCサーバを利用して、複数の特定のクライアントPC（NEC製PC98）から同時に利用できるものとする、というものであった。

具体的には、個人のPCで作成・管理していた（PCサーバ上に保管してはいたが）データベースファイルを、PCサーバに一括して登録することができる大きな一つのデータベースシステムに替え、複数のクライアントPC（5ユーザーまで）から同時に利用できるようにするのである。

3. 1. 構築にあたって

図書室の受入・整理業務の流れに合わせ、業務全般に生かせるものにしてもらうことになった。

史料の受入・検収→書誌データ入力→帳票作成・登録→閲覧・事務用カード、ラベル等

作成→装備・配架→統計（年度ごとに種類別受入数集計）出力
の各作業がこのシステムにより、支障なく行えることが目標である。

また、複数で使うので、できるだけ使いやすいインターフェイス（入力フォーム等）を作成するよう要望した。

そして、既存のデータをそのままの形で容易に一括登録できる機能を持ち、スムーズにデータ移行を行えることが重要であった。

他方、F/Hへ格納するために、CSV形式のテキストファイルを出力する機能を持たなければならない。

3.2. プログラム開発業者（NEC）からの提案

上記（3.1.）のような要望を盛り込んだ仕様書を提出したことにより、プログラム開発業者からは次のような提案がなされた。

まず、既存アプリケーション（“MS-Access”）の利用である。メリットとして、①データ入力・更新・検索が可能、②リレーショナルデータベースの構築が容易、③各種クエリーの作成が可能、④各種帳票（目録カード、ラベル、年間受入数統計等）の出力が可能、⑤ユーザー毎に帳票等のデザインを変更することが可能、等があげられる。使用する図書職員もある程度操作に習熟しつつあったことも幸いした。

そして、SQL（SQL Server 6.5）の採用が提案された。最大のメリットは、新規導入はこれのみで、あとは既存のものを使用できることである。

さらに、使いやすい入力フォーム（インターフェイス）の案として、次のようなことが提案された。

- ・データのID化：入力値をあらかじめ設定できるテキストデータを数値化する。入力を単純化することができ、データ長を短縮できる。
- ・サブテーブルの作成：データのID化のため、テキストデータと数値データの対象テーブルを作成する。
- ・ヨミの自動付与：漢字入力時入力したキー通りに、ヨミフィールドにカタカナで自動入力される。
- ・コンボボックスの作成：入力値がある程度限定できるフィールドでの入力を、あらかじめ設定しておくことで、単純化することができる。各人が自由にアレンジできる。
- ・トグルボタンの作成：入力値が限定（三つ）できるフィールドのデータを、ボタンで選択できる。
- ・自動入力フィールド：登録年度等、あらかじめ設定しておいたデータを自動入力させることができる。
- ・必須フィールドの設定：入力しないとエラーとなるフィールドを設定することにより、入力ミスを防ぐことができる。
- ・入力する史料の種類別に四つのフォームを作成：その種類に不必要なフィールドは表示させない。
- ・セキュリティの問題：当該レコード登録者、登録日付、更新日付のフィールドを新設。自動

〈表2〉写本の例

203. 参 考 図 書	
203. 2 年	表
三國一覽合運	3040. 0-2
原蔵 本派本願寺仏教大学 (京都市下京区西六条)	
影写 大正4 (1915)	
3冊 (典籍1点) 37cm	
内容	
1・上 (神代一孝元天皇57年)	
2・中 (開化天皇元年一嵯峨天皇〔弘仁14年〕)	
3・下 (淳和天皇〔天長元年〕一後柏原天皇 〔大永3年〕)	
三國合運	3040. 0-1
原蔵 柏木貨一郎 (東京市)	
影写 明治23 (1890)	
66丁 (典籍1点) 37cm	
『東京大学史料編纂所図書目録 和漢書写本編』より	

〈表3〉写真帳の例

40. 1 日本史総記	
一代要記	6140. 1-1
原蔵 東山御文庫 (京都市上京区)	
撮影 昭和34 (1959) 引伸 昭和34 (1959)	
4冊	
〔宮内庁書陵部撮影〕	
内容	
1・1 (春)	77p
(允恭天皇一醍醐天皇)	
2・2 (夏)	92p
(朱雀天皇一高倉天皇)	
3・3 (秋)	62p
(安徳天皇一後嵯峨天皇)	
4・4 (冬)	116p
(後深草天皇一花園天皇)	
王季兩代混雑記	6140. 1-7
原蔵 白井英治郎 (愛知県宝飯郡一宮町)	
撮影 昭和40 (1965) 引伸 昭和45 (1970)	
1冊 50p	
(神代一寛永19年, 大正11年白井英治郎写)	
『東京大学史料編纂所写真帳目録』より	

入力される。

F/Hへ格納するためのCSV形式のテキストファイルを出力することに関しては、PCサーバにより直接CSV形式のデータをテーブルごとに変換出力 (bcp コマンド使用) するしくみが提案された。

3.3. 既存データベースファイルから“Hi-CAT”への移行

まず、階層構造と項目の整理を行うことが必要であった。大幅な見直しを行うこととなった。

『所蔵史料目録データベース(ver. 1)』では、1レコードが一物理単位を表していたが、“Hi-CAT”では、出版済み目録 (写本〈表2〉、写真帳〈表3〉) の書誌構造にあわせることとした。外注入力を既に依頼していた『東京大学史料編纂所図書目録 和漢書写本編 一〜十』10冊分⁽⁹⁾約2万レコード (1998年10月完成) の格納が必要であったことも大きな理由の一つである。例えば、多巻ものは、1書目レコードに複数の冊テーブルがリンクされることになる。

そこで、採用される“MS-Access”のテーブル構造を利用し、次のようにすることとした。〈表4〉

メインテーブル：書目テーブル／冊テーブル／細目テーブル／解題テーブル

サブテーブル：区分コードテーブル／別置記号テーブル／受入コードテーブル

リレーショナルデータベースであるため、レコードをID番号で管理し、ID番号でテーブル間のリンクを作成する。

〈表4〉入力データレコードのレイアウト

1 書目テーブル

No.	項目名	DB登録 用項目
1	書目ID	○
2	区分	○
3	別置記号	○
4	架	○
5	番	○
6	枝番号	○
7	書名(タイトル)	○
8	書名ヨミ	
9	著者名	○
10	原蔵者	○
11	原蔵者ヨミ	
12	原蔵者所在地	○
13	出版事項	○
14	撮影・複本作成	○
15	引伸	○
16	形態1	○
17	大きさ	○
18	リール数	○
19	注記1	○
20	原別置記号	○
21	原架	○
22	原番	○
23	原枝番号	
24	採訪者	
25	トレーシング1	
26	トレーシング2	
27	地域分類	○
28	所報etc.掲載	○
29	合綴指示記号	
30	利用制限	
31	備考1	
32	登録者	
33	登録日付	
34	更新日付	
35	レコード区切	

2 冊テーブル

No.	項目名	DB登録 用項目
1	冊ID	○
2	書目ID	○
3	号	○
4	形態2	○
5	コマ数	○
6	重複数量	○
7	原号	○
8	受入コードID	
9	登録年	
10	登録番号	
11	査定・価格	
12	受付番号	
13	冊次表記	○
14	注記2	○
15	備考2	○
16	登録者	
17	登録日付	
18	更新日付	
19	レコード区切	

3 細目テーブル

No.	項目名	DB登録 用項目
1	細目ID	○
2	冊ID	○
3	史料名	○
4	史料名ヨミ	
5	注記3	○
6	原蔵者分類番号	○
7	年紀	
8	image.start	○
9	image.end	○
10	備考3	
11	登録者	
12	登録日付	
13	更新日付	
14	レコード区切	

4 解題テーブル

No.	項目名	DB登録 用項目
1	解題ID	○
2	書目ID	○
3	冊ID	○
4	細目ID	○
5	解題	○
6	登録者	
7	登録日付	
8	更新日付	
9	レコード区切	

5 別置記号テーブル

No.	項目名	DB登録 用項目
1	別置記号ID	○
2	別置記号	○
3	登録者	
4	登録日付	
5	更新日付	
6	レコード区切	

6 区分テーブル

No.	項目名	DB登録 用項目
1	区分ID	○
2	区分コード	○
3	史料種別	○
4	レコード区切	

鶴平和情報センター作成資料より

同時に、不要と思われる項目を整理し、削除することにした。

データに関しては、既存の約5万レコードと前述した外注入力分約2万レコード等を移行することが必要であった。

その後、4.で述べる公開データベースの改良に伴い、画像ファイルとのリンクに関して、ファイルのディレクトリ名とデータとのリンクテーブルを別に用意することを廃止することとなった。項目設定後に決まったことであるため、冊テーブルの「備考」フィールドにイメージディレクトリ名を入れることで、代替した。担当者がすべて手作業でデータ移行（コピー&ペースト）を行うこととなり、かなりの手間がかかった（約2万5千レコード分?!）。

3.4. “Hi-CAT”の課題

約1ヶ月の試行期間をおき、1998年度より、“Hi-CAT”へ切り替え、入力を開始した。

試行→実施にあたって、予期せぬエラーが多発し、作成業者（NEC）に頻繁にプログラム修正を依頼することになってしまった。例えば、データをコンバートした際、設定しておいたフィールド長が不足した。すべてのレコードのフィールド長をチェックしておいたわけではなかったためである。他に、機能がうまく働かない（クエリー、レポート出力）などである。また、ディスク容量が予想よりも多く必要になり、1998年5月中旬HDDを増設した。

使用が進むにつれて、このように改善点が数々浮かび上がり、その時点で修正できるものは修正し、できないものは今後の課題となった。

一方、“Hi-CAT”にバックアップデータを発生・保管させるシステムがないため、担当者が定期的にバックアップデータを作成し、管理する必要がある。複数の人が使用するので、誤って他の人が作成したデータを削除してしまうなどのミスも想定され、以前より入力作業に慎重さが求められるようになった⁽¹⁰⁾。

他方、特殊蒐書目録データ（既存冊子体目録のデータ等を使用）を遡及して入力していく（外注入力等による）はこびとなった⁽¹¹⁾。データ完成後、“Hi-CAT”に格納し、順次公開していく予定である。その際の作業に伴う手間が、担当者にとっては、やや煩雑である。“Hi-CAT”に一括格納するには、『所蔵史料目録データベース(ver. 1)』の構造で入力してもらう必要がある。そのため、外注入力の場合、“Hi-CAT”の構造に合致するか等レコード毎の確認がどうしても必要となる。既存データ及び前述した外注入力分のデータを移行した後、このような形で多量のデータをコンバートする必要が生じるとは予想していなかったため、不備な点が出てきてしまった。

4. 『所蔵史料目録データベース(ver. 1)』の改良による『所蔵史料目録データベース(ver. 2)』の構築

“Hi-CAT”の開発に伴い、F/Hのシステムに関しても、プログラム等に変更の必要性が発生することとなった。

あわせて、以下に述べる改良を行った後、1998年10月にデータ移行、11月に試行、1999年1月から所外へ公開する予定である⁽¹²⁾。この結果、2.6.で述べた課題の大部分を、ひとまず改善できることとなった。

〈表5〉簡易検索画面

所蔵史料目録データベース

(C) 東京大学 史料編纂所

〈所蔵史料目録84907件の検索ができます、更新日：1999.07.09〉

検索したい言葉(20文字以内)をフィールドに入力し、【検索実行】ボタンを押して下さい。空白(スペース)で区切ると、4語までAND検索が行えます。

キーワード：

検索したい言葉の末尾に*(アスタリスク;全角・半角いずれも可)を付けて、前方一致検索をすることをお勧めします。

検索したいデータの□をクリックしてください。(複数選択可)

わからない場合は、そのままで結構です。

貴重書	☐ 原本・古写本	☐ 模写	☐ 拓本
	☐ 台紙付写真	☐ 原物史料	☐ 模造史料
	☐ 古写真	☐ 特殊蒐書	全特殊蒐書
写本類	☐ 謄写本	☐ 影写本	☐ その他の写本
写真帳・フィルム類	☐ 写真帳	☐ レクチグラフ	☐ レプリカ
	☐ CD-ROM	☐ ビデオ・カセット	☐ マイクロフィルム
	☐ 採訪マイクロフィルム	☐ 寄贈マイクロフィルム	☐ シートフィルム

検索方法

【キーワード通覧】：キーワード一覧を呼び出します。

検索フィールドに文字が入力されている場合、その文字を先頭としたキーワードを表示します。

【検索履歴】：これまで行ってきた検索の履歴を表示します。

各検索結果をAND(論理積)、OR(論理和)、NOT(論理差)で二次検索ができます。

【クリア】：検索フィールドをクリアします。

【詳細検索】：項目ごとにAND(論理積)、OR(論理和)検索ができます。

[\[ホーム\]](#) [\[データベース選択\]](#) [\[詳細検索\]](#) [\[ヘルプ\]](#) [\[図書室のご案内\]](#)

4.1. プログラム等の変更によるメリット

まず、“Hi-CAT”の階層構造のまま、テーブルごとにコンバートできることがあげられる。『所蔵史料目録データベース(ver. 1)』では、請求番号(枝番号を含む複数フィールドにわたる)を対照して、階層のリレーションを行っていたため、システム開発業者により、その作業を行うプログラムが作成・実行されていた。『所蔵史料目録データベース(ver. 2)』では、ID番号のみでリレーションを行えるようになったため、そのプログラム及び作業は不要となった。

PCサーバを直接使用するので、レコード数が多くても(テーブルにより10万件を超えるものもある)、CSV形式での出力にはそれほど時間も手間もかからない。また、テーブルの数だけ出力すればよいので、はるかにファイル数が少なく済む。

そして、CSV形式で出力されたテキストファイルをF/Hのシステムに一括登録(自動登録)す

〈表 6〉 詳細表示画面の例
所蔵史料目録データベース

(C) 東京大学 史料編纂所

先頭

前件

次件

最終

一覧

3/8

《書目データ》

【書目ID】

1210

【史料種別】

影写本

【請求記号】

3071.02-2

【書名】

賜芦文庫文書

【著者名】

新見正路編

【原蔵者】

不詳

【出版事項】

影写 明治18(1885)頃

【形態】

54冊 (文書・記録・系図・肖像・書蹟)

大きさ:36cm

《冊データ》

18. 18

内容細目表示

画像表示

【注記】

(文書・記録・肖像・書跡59点)

先頭

前件

次件

最終

一覧

※虫損等により閲覧できない史料もありますので、ご来所の際には、事前に図書室へお問い合わせください。

ホーム

データベース選択

簡易検索

詳細検索

ヘルプ

図書室のご案内

る操作を、担当者が直接行えるようになった。データの更新頻度を自由に設定できるようになり、頻度を高めることができる。

4. 2. インターフェイスの改善

この機会に、できるだけユーザー（研究者・一般利用者）の立場に立ち、使いやすいデータベースをめざした。次のような改善点をあげ、システム開発業者に対処してもらうこととした。

- ・「データベース選択画面」（“SHIPS”全体に関わる）の分類・整理
- ・検索画面の区分選択項目のレイアウトを変更し、選択しやすくする。〈表 5〉

カテゴリー化を行う。

特殊蒐書名をプルダウンで全表示→選択する方式とする。

- ・項目、ボタン等の整理をする
- ・表示する階層構造を、“Hi-CAT”にあわせた形にする。

3段階の表示とする＝第1段階：書目＋冊のデータ→第2段階：細目データの簡略表示
→第3段階：細目データの詳細表示

- ・画像、解題のリンクは、従来通り該当テーブルとともに表示させる。
- ・表示形式の種類（史料の形態による）を統一する（それまでは4種類存在）。〈表 6〉

〈表7〉表示方法の選択（一覧表示画面）

所蔵史料目録データベース

(C) 東京大学 史料編纂所

検索式：((sysfree=肖像*)) and (lsec<=1)

検索結果：261件データが見つかりました。

詳細表示方式：● 全表示 ○ 限定表示

[次 頁](#) [最 終](#) [ソート](#) [検索履歴](#)

No.	区分	請求番号	書 名	原蔵者
1	原本	0102-1	南谿遺書	
2	原本	0134-2	叢林文藻	
3	原本	0163-1	古今和紙譜	
4	原本	0180-4	当世武勇伝	
5	原本	0380-9	魁題百撰相	
6	原本	0380-10	近世義勇伝	
7	原本	0380-14	文久麻疹流行漫画集	
8	原本	0380-15	將軍上洛東海道行列図	
9	原本	0380-17	維新前後風刺画	
10	原本	0380-63	近世人物誌	
11	原本	S-0854-2	観中中諦画像	
12	原本	貴01-29	飛鳥井政敦肖像並自筆和歌	三条実枝添
13	原本	S-貴07-4	四代公肖像（林信充）	
14	原本	S-貴26-12	林述斎肖像	
15	原物史	原-1	アメリカ大統領ブキャナン肖像メダル	
16	古写真	古写真-1	久原躬弦肖像写真	
17	古写真	古写真-6	安田善一郎銀板（ダゲレオタイプ）写真	
18	模写	波-41	山県三郎兵衛昌景画像	帝国図書館所蔵肖像集所載
19	模写	波-279	異船神奈川県居之図并提督彼理肖像	
20	模写	呂-426	於富の方（華陽院源応尼）画像	龍拈寺

[次 頁](#) [最 終](#) [ソート](#) [検索履歴](#)

詳細表示方式

全表示：キーワードにヒットした全体(最大単位)を表示する。

限定表示：キーワードにヒットした部分(最小単位)のみ表示する。

一覧表示項目補足説明

区分：先頭から3文字までを表示しています。

書名：先頭から18文字までを表示しています。

原蔵者：先頭から18文字までを表示しています。

原蔵者所在地：先頭から7文字までを表示しています。

[ホーム](#) [データベース選択](#) [簡易検索](#) [詳細検索](#) [ヘルプ](#) [図書室のご案内](#)

〈表 8〉詳細検索画面
所蔵史料目録データベース

(C) 東京大学 史料編纂所

検索実行	キーワード通覧	検索履歴	クリア
------	---------	------	-----

<所蔵史料目録84907件の検索ができます。更新日：1999.07.09>
検索したい言葉(20文字以内)をフィールドに入力し、【検索】ボタンを押して下さい。
検索したい言葉の末尾に* (アスタリスク;全角・半角いずれも可)を付けて、前方一致検索をすることをお勧めします。

キーワード : ● and ○ or

and ● and ○ or

請求番号 : ▼

or ▼

書名・史料名 : ● and ○ or

著者名 : ● and ○ or

原蔵者 : ● and ○ or

原蔵者所在地 : ● and ○ or

検索したいデータの□をクリックしてください。(複数選択可)
わからない場合は、そのままで結構です。

貴重書	☐ 原本・古写本	☐ 模写	☐ 拓本
	☐ 台紙付写真	☐ 原物史料	☐ 模造史料
	☐ 古写真	☐ 特殊蒐書	全特殊蒐書 ▼
写本類	☐ 謄写本	☐ 影写本	☐ その他の写本
写真帳・フィルム類	☐ 写真帳	☐ レクチグラフ	☐ レプリカ
	☐ CD-ROM	☐ ビデオ・カセット	☐ マイクロフィルム
	☐ 採訪マイクロフィルム	☐ 寄贈マイクロフィルム	☐ シートフィルム

検索実行	キーワード通覧	検索履歴	クリア
------	---------	------	-----

検索方法

【キーワード通覧】：キーワード項目選択画面を表示します。
ここから先頭キーワードを設定することが可能です。

【検索履歴】：これまで行ってきた検索の履歴を表示します。
各検索結果をAND（論理積）、OR（論理和）、NOT（論理差）で二次検索できます。

【クリア】：検索フィールドをクリアします。

[ホーム] [データベース選択] [簡易検索] [ヘルプ] [図書室のご案内]

- ・表示方法の選択（全表示／限定表示）〈表7〉

＝多巻ものの場合等、検索したキーワードを含むレコード（巻）のみを限定的に表示させる。

全表示：リスト表示→詳細表示①（書目＋冊）→詳細表示②（細目の簡略表示）→詳細表示③（細目の詳細表示）

限定表示：リスト表示→詳細表示①（書目＋冊）→詳細表示③（細目の詳細表示）

- ・操作ガイド、ヘルプの充実をめざす（順次予定）。

各表示項目（フィールド）の説明などを加える。

- ・イメージ画面・解題画面にリンクされている場合、ボタンを押すと別ウィンドウが立ち上るようにする。これにより、書誌情報を見ながら、閲覧できるようになる。

これらを実現させるために、Java Scriptを採用することとなった。

4.3. 検索方法の見直し

インターフェイスの改善とともに、検索方法の見直しも行った。次のような改善点をあげ、対処してもらうこととした。

- ・キーワード検索を改良する。

区切り記号（スペース）で、複数（4つまで）のキーワードの AND 検索を可能としてもらう。〈表5〉

- ・ヒット率を高める工夫を提示する。

検索に際しての説明を充実させる。「*」の付加（前方一致検索）を勧める等。

- ・キーワード辞書（教官が作成）の見直しをしてもらう。長いキーワードを単語に分割する等。

- ・キーワードの検索対象項目の見直しを行う。

請求番号をキーワードとして切出す等。

- ・詳細検索画面の改善をはかる。〈表8〉

別置記号ををプルダウンで全表示→選択する方式とする。

請求番号の範囲検索を OR 検索に変更する。

5. おわりに

以上、『所蔵史料目録データベース』の構築と公開について述べてきたのであるが、筆者の能力不足で、現状と課題を羅列するのみとなってしまった。最後に、これまで述べてきたような作業を通して感じたこと、あるいは、このたび史料管理学研修会に参加する機会を得たことにより、気づいたことなどを記しておきたい。

5.1. 東京大学史料編纂所の特殊性

史料編纂所は、東京大学の附置研究所で、「本邦に関する史料の研究、編纂及び出版」を行うことを目的としている。この目的のためには、所属する教官が所蔵史料を利用することは不可欠である。一方、史料編纂所の図書室は、東京大学の附属図書館の一部である。所蔵史料は、広く内外の研究者・一般利用者に公開されており、年間延べ約一万人もが訪れている。

収蔵する史料を中心に考えると、文書館的要素が大きいが、組織的には、大学図書館であり、図

書室に配属されるのは、多くが史学や史料管理学等の専門知識を持たない図書職員（司書）である。

実際に記録史料の整理、目録編成・作成に携わるのは、主に教官である。図書職員は、整理後の受入・データ入力・登録・装備等を担当している。ただし、複製史料については、整理から行うことも多い。

筆者自身、そのような体制の中で、どうしても受動的に業務を行うことが多かったと反省している。今回の研修に参加して、知識・経験不足を痛感するとともに、今後、もっと主体的に業務を行うべきではないかと気づかされたように思う。

5.2. 史料類の標準的な記述規則の必要性

日常の整理業務においても同様であるが、『所蔵史料目録データベース』の構築に際し、史料類の整理に関して、標準的な目録規則が見あたらないため、大変困った。史料編纂所においても、明文化された目録規則は存在しないようである。複製史料についても、同様である。図書館においては、標準的な目録規則が採用されているのに、何故それにあたるものがないだろう？というのが、当初筆者が抱いた素人の素朴な疑問であった。

筆者の身近にある目録規則には、『日本目録規則1987年版 改訂版』⁽¹³⁾や『英米目録規則 第2版』(AACR 2)⁽¹⁴⁾があり、史料類に関する記述も若干含まれている。しかし、いずれも史料類のみを対象としたものではなく、参考にはなるが、それだけで階層構造や記述の根拠となるものではないように思う。

もちろん、史料類は図書のように比較的単純に分類したり、規則的に目録編成できたりするものではないであろう。それでも、基準となるような大きな柱だけでも存在してほしいし、業務上の必要性を感じる。

東京大学附属図書館においては、かつて、既定の OPAC のデータ構造と対応させることにより文書のコレクションをデータベース化する実験的な試みがなされている⁽¹⁵⁾。

最近では、『国際標準記録史料記述（一般原則）』（以下“ISAD(G)”）を史料整理に適用する試みが数々なされている⁽¹⁶⁾。これらの成果等により、なるべく早い時期に標準的な記録史料の記述規則が普及し、採用が進められることを望んでいる。

5.3. 『所蔵史料目録データベース』の今後の課題

現在のところ、『所蔵史料目録データベース』は、所蔵目録であり、いわゆる文書目録とはいえないと筆者は考えている。利用者がいつでもどこからでも所蔵を確認できることを第一にめざしたものであり、目的とする史料にたどりつけるように援助するツールであると考え。そのためにも、今後はデータの更新頻度を高め、サービスを向上させていく予定である。

所蔵図書類（現在、学術情報センター“NACSIS-CAT”で蔵書管理。東大 OPAC で検索可能）のデータと合せて、史料編纂所の全所蔵史料・資料の目録（史料編纂所 OPAC）とすることも課題の一つである。

文書目録に求められるような詳細な情報については、教官が作成している種々のデータベースが既にある。『所蔵史料目録データベース』から、それらのデータベースに導けるような工夫は今後

〈14〉『所蔵史料目録データベース』の構築と公開について（内村）

必要になるかもしれない。例えば、“SHIPS for Internet”のすべてのデータベースにわたり、キーワード検索が縦断的に行えるようにする。あるいは、『所蔵史料目録データベース』の中の該当レコードにリンクさせ、より詳細な情報を提供する等である。

また、『所蔵史料目録データベース』の現在の形態は、最終的なものではなく、過渡的なものと筆者は考えている。これまでも試行錯誤の連続であったし、これからもそうなることであろう。実施するのには困難が伴うであろうが、より使い易いものに改良(階層構造、記述方法、項目、インターフェイス、検索効率の向上など)を重ね、より洗練されたシステムを作り上げていくような態勢作りが継続的に必要となるのではないだろうか。このたびの『所蔵史料目録データベース』の構築と公開に際しては、そのような機会に恵まれて、幸運であった。

5.2. で述べたように、“ISAD(G)”等標準的な記録史料の記述規則の採用が進んだ場合、それにあわせて項目や記述内容などを変更していくことも可能であろう。

5.4. 情報収集とネットワーク作りの必要性

“ISAD(G)”について、「…“ISAD(G)”がめざすのは、記述のための枠組みの提供であり、枠内での記述方法の詳細な規程ではない」、「…それがコンピュータを使用した記述、さらには国際的なネットワーク上でのオンライン検索を視野にいたったものであることは明白である」と述べられている⁽¹⁷⁾。標準的な記録史料の記述規則の採用が進むにしたがって、文書館間のネットワーク作りが急激に進むのではないかと期待している。例えば、文化庁で推進する博物館・美術館収蔵品の『共通索引』⁽¹⁸⁾のような形式で、文書館間での分散型のデータベースが実現するのではないだろうか。

その際、その中に『所蔵史料目録データベース』も入っていくことができるよう、情報収集や準備をすすめていくことも、これから求められるであろう。

個人的にも、今回史料管理学研修会に参加してみて、大学図書館はもちろんのこと、文書館や博物館等の動向を知ったり、情報を収集・交換したりする必要性を感じている。

最後に、研修に参加することにより、図書館とは異なる文書館的発想の仕方や、目録編成の方法をはじめ、多くの示唆をいただき、且つ沢山のことを学ばせていただきました。こんなに何も知らずに、データベースの構築といったような仕事に関わっていてよいのだろうか、愕然としたり、慄いたりしています。これから史料管理に関して学ぶべきことは多く、それを今後の業務に活かしていけたらと考えています。

〔註〕

- (1) この報告は、平成10年度史料管理学研修会〔短期研修課程〕で提出(1998年12月)した研修レポートに若干修正を加えたものである。
- (2) 永村眞「日本史史料データベースとデータ処理に関する研究」(『国立歴史民俗博物館研究報告』30集, 国立歴史民俗博物館, 1991. 3, pp. 109-143)、近藤成一「史料編纂所と電算機」(『歴史評論』No. 578, 校倉書房, 1998. 6, pp. 66-75)など。
- (3) 横山伊徳「史料編纂所歴史情報処理システム SHIPS for Internet」(1997. 2)
- (4) 科学研究費「WWW サーバによる日本史データベースのマルチメディア化と公開に関する研究」(研究

代表者：加藤友康）によって作成された。

- (5) 全文検索に特化したインターネット対応済みのパッケージである。Future/Happiness Light for Internetの機能として、①高速検索、②キーワード自動抽出、③キーワード一覧表示機能、④セキュリティー対応：アクセスできる利用者や、参照できる項目を端末のIPアドレスによって、制限を行うことができる、⑤インターネット対応：HTML自動生成機能等、⑥検索結果のソート機能、があげられている。(株式会社平和情報センター作成資料より)
- (6) 対象史料は、貴重書のうち古文書、入来院家文書、錦絵、影写本である。貴重書のうち古文書の画像・解題は、特定研究経費「東京大学史料編纂所蔵文書の伝来過程についての研究」(研究代表者：保立道久)によって作成された。錦絵の画像は、特定研究経費「幕末維新期の対外関係史料の収集・分析」(研究代表者：横山伊徳)によって作成された。影写本の画像は、科学研究費「WWWサーバによる日本史データベースのマルチメディア化と公開に関する研究」(研究代表者：加藤友康)によって作成された。
- (7) 対象史料：原本、写本、影写本、謄写本、模写、拓本、模造史料、写真帳(マイクロフィルムを焼き付けて製本したもの)、写真、マイクロフィルム、シートフィルム(4×5フィルム等)、CD-ROM、ビデオテープ、特殊菟書等である。
- (8) (3)に同じ。
- (9) (3)に同じ。その書誌構造にあわせ、“MS-Access”での入力に依頼されていた。
- (10) 1999年度より、DAT装置でカートリッジテープを使用し、バックアップを行うことが可能となった。
- (11) 研究成果公開促進費「日本史史料書誌統合データベース」(研究代表者：黒田日出男)によって作成される。
- (12) (3)に同じ。
- (13) 『日本目録規則1987年版 改訂版』には、「第Ⅰ部 記述 第3章 書写資料」がある。
- (14) 『英米目録規則 第2版』(AACR2)には、「第4章 手稿(手稿集を含む)」の記述がある。
- (15) 永田治樹・増田元・竹内比呂也「文書目録情報のデータベース化の問題—文書OPAC作成とMARC(AMC)の事例から」(『大学図書館研究』33号, 学術文献普及会, 1988. 12, pp. 41-51)
- (16) 森本祥子「『国際標準記録史料記述(一般原則)』適用の試み—諸家文書の場合—」(『史料館研究紀要』28号, 国文学研究資料館史料館, 1997. 3, pp. 229-274)、森本祥子「『国際標準記録史料記述(一般原則)』適用の試み—行政文書の場合—」(『史料館研究紀要』29号, 国文学研究資料館史料館, 1998. 2, pp. 402-430)、青山幸幸「国際標準記録史料記述等による箱館奉行文書目録作成の実験について」(『研究紀要』12号, 北海道立文書館, 1997. 3, pp. 44-84)
- (17) 森本祥子「『国際標準記録史料記述(一般原則)』適用の試み—諸家文書の場合—」(『史料館研究紀要』28号, 国文学研究資料館史料館, 1997. 3, pp. 229-274)より引用。
- (18) 高見沢明雄「文化庁で推進する博物館・美術館収蔵品の『共通索引』」(『人文学と情報処理』17号, 勉誠出版, 1998. 7, pp. 35-41)

【参考文献】

- [1] 中野美智子「近世地方史料の整理について」(『大学図書館研究』28号, 学術文献普及会, 1986. 6, pp. 87-94)
- [2] 平瀬直樹「データベースと文書館業務」(『山口県文書館研究紀要』19号, 山口県文書館, 1992. 3, pp.

26-36)

- [3] 田良島哲「史料情報の電子化とオンライン流通に関する諸問題」(『古文書研究』40号, 日本古文書学会, 1995. 3, pp. 57-66)
- [4] 山田哲好「文書館におけるコンピュータの利用状況」(『人文学と情報処理』7号, 勉誠出版, 1995. 3, pp. 43-49)
- [5] 原正一郎「国文学研究とインターネット」(『人文学と情報処理』7号, 勉誠出版, 1995. 3, pp. 46-55)
- [6] 原正一郎「国文学研究と国文研ホームページ」(『人文学と情報処理』15号, 勉誠出版, 1997. 12, pp. 29-44)
- [7] 柴山守「古文書画像データベース—WWWによる画像検索についての現状と将来展望—」(『人文学と情報処理』15号, 勉誠出版, 1997. 12, pp. 45-50)
- [8] 横山伊徳「WWWサーバによる『琉球外国関係文書』の公開」(『人文学と情報処理』15号, 勉誠出版, 1997. 12, pp. 51-56)
- [9] 坂村健「デジタルミュージアム」(『人文学と情報処理』17号, 勉誠出版, 1998. 7, pp. 13-17)
- [10] 横山伊徳「インターネット時代の歴史学」(『歴史評論』No.578, 校倉書房, 1998. 6, pp. 11-23)
- [11] 青山英幸解説・森本祥子訳「国際文書館評議会記述基準特別委員会編国際標準記録資料記述: 一般原則」(『記録と史料』第6号, 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会, 1995. 9, pp. 106-117)
- [12] 大友一雄・五島敏芳「文書館活動と情報資源化の構想—古文書整理からの展開—」(『史料館研究紀要』第30号, 史料館, 1999. 3, pp. 37-93)
- [13] 安藤正人『記録史料学と現代—アーカイブズの科学をめざして—』(吉川弘文館, 1998. 6)
- [14] 研究代表者 加藤友康「WWWサーバによる日本史データベースのマルチメディア化と公開に関する研究」(科学成果報告書, 1999. 3)